

2019年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名 小浜市立小浜小学校 ☆校長名 森 徳実 ☆所在地 小浜市駅前町13-29
☆教員数 19名 ☆児童数

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特支	計
児童数	42	46	43	39	51	32	5	258

☆学校の特色や児童の実態

本校には40年以上続く伝統の遠泳大会がある。今年度も5・6年生がそれぞれの目標を達成し、充実した大会となった。また、これまでの学習発表会を改め「おばマナビ」と題して、見に来てくださった保護者や地域の方を巻き込んでの参加型の学習交流会を行い、児童の学びを深めた。本校児童の全体的な特性として、周囲を気にして自己表現が遠慮がちになるという面がある。本校在籍児童数に占める校区外から通う児童の割合は約35%で、小浜小校区以外の8つの校区から通っている。特別な支援を要する児童の数も増え、保護者の価値観も多様化してきている。

2 基礎学力向上対策事業

☆研究主題 生き生きと学ぶ子の育成 ～「～たい！」があふれる子どもを育てる～

☆研究概要

子どもが「解決したい」「伝えたい」と主体的に学びに向かうために、算数科を中心に、「ねらい・つきたい力・つまずき等を明確にした教材研究」「3S学習を中心にした学び合い」「視点を明確にした振り返り」などを行い、授業改善に努めてきた。基礎学力向上のため、漢字・計算力テストを2回実施した。いずれも、事前に10日間ほどの学習期間を設けることにより達成感を味わうことができるよう計画した。

☆研究の成果と課題

- 1 学年2クラスあることを活かし、校内研究授業を同一単元で行い、二人で教材研究をするようにした。単元構想シート（雲浜小授業力アップの取り組みを参考にした物）を使うことでより深く丁寧な教材研究ができた。研究授業後に事後研究会をして改善点を次の授業に活かすこともできた。
- 3 S黒板の使い方の共通理解を図った。時間とともに子供たちで授業が始められるように、また学びを見通して次時につながるように黒板を活用した。
- 1 学期の反省で「振り返りができていない」と言う意見が多かったので、2学期は「わがとも」を共通の振り返りの視点を決めて実践を行った。単元の「どこで」「何を」振り返るかを計画的に行うようにした。振り返りをする場面は増えたが、「パターン化してしまう」「活用できていない」などの反省があった。

3 ふるさと小浜MIRAI事業

☆目標

ふるさとの産業や自然、食、伝説などについて調べる活動を通して、ふるさとの課題を知り、児童自らが課題解決に向けて主体的に考え、行動する中でふるさとに貢献する喜びを味わい、次代を担う地域の一員としての自覚を高める。

☆研究概要

3～6年生の発達段階、興味関心に応じて、次のようなテーマおよび活動を行った。

① ふるさと小浜の魅力を伝えよう（6年生）

これまでのふるさと小浜についての学習に積み上げ、歴史、自然、食の魅力等について新たな視点で小浜の魅力を再発見する体験的な活動を展開した。その後、魅力を発信する方策や小浜の活性化に向けたアイデアをまとめて修学旅行で大学生に発表したり、「旭座」で地域へ発信したりした。

② 鯖のよさを生かしたまちづくりを考えよう（5年生）

「よっぱらい鯖」の原点となる鯖についての調べ学習を進めた。地元の缶詰工場や栽培漁業センター等を見学したり、「よっぱらい鯖」の養殖地で育て方や発酵食品作りについて話を聞いたりした。

③ 小浜の名水（湧水）について（4年生）

社会科と関連させて「小浜の地下水・湧水」について学習を進めた。県立大学の先生の話や利き水体験を通して基礎的な学習をした後、市役所の担当者や地域コーディネーターと小浜市内のフィールドワークを行った。水源地などを巡るバスツアーなども行い、水の循環についても学習した。

④ 小浜の名所・名産に触れる（3年生）

児童の興味関心に基づき、西組、放生祭、若狭塗り箸、八百比丘尼伝説、名水、くずまんじゅう、

海などの題材を取り上げ、KISUMO小浜からの支援をうけながら触れたり体験したりした。また、旭座で地域の方々との交流を行い、さらなる課題発見にもつなげた。

☆成果と課題

できるだけたくさんの方の名所・名産に触れることを目的としたが、活動の意図の意識付けが不十分であった。しかし、旭座での発表・交流の中で自分たちの活動が評価され、これまで以上に達成感と次への意欲がわいてきた様子であった。地域コーディネーターにつないでいただいた団体の方の協力のおかげで、より専門的な活動になったりより安全な活動になったりと活動が充実した。学んだことをどう発信し、どのように学びを深めていくかが課題である。

4 人権教育

☆研究概要

一人一人の人権課題が守られているか見直すとともに、人権意識を高めることを目的に進めた。自分たちの学校生活上の人権課題を自分たちで解決できる力を育成するために、児童が学校の人権課題を話し合う機会を設けた。挙がってきた課題は、言葉遣いの荒さやルールを守れないといったものであった。それらの人権集会で取り上げ、「学校生活上の約束事を守る」「要求は言葉で伝える」等、全校児童で確認した。

拉致問題については、6年生がアニメ「めぐみ」を視聴するとともに、地村保志さんからお話を聴かせていただいた。



☆研究の成果と課題

生活委員会の児童を中心に児童が自分たちの学校の人権課題の解決に向けて動けたことが成果である。4～6年生の各学級で、生活委員が学校の人権課題について話し合う機会を作り、出てきた意見から特に解決したいことを絞って、解決策を考えた。劇で問題点とその改善策を全校児童に伝えることができた。今後は、取組が一過性にならないように、担当を中心に教員間の人権意識の共有が必要である。次年度は、人権週間前ではなく、年度初めに学校の人権課題を明らかにし、年間を通じて働きかけができるようにしていく計画である。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

年度初めに調べた児童の箸の持ち方では、正しく持てる児童が40パーセントと大変低いことが分かった。そこで、本年度は「箸の使い方や魚の食べ方」等、食事のマナーに関する学習を取り入れた食の教育を進めてきた。

1. 箸の持ち方の職員研修

市教委から配付されたDVDを見ながら、実際に箸を持つ研修の時間を持った。豆つかみりレーで認定するためにも正しい持ち方の確認をした。

2. お魚ぺろりコンテスト

魚の食べ方を学んだ後真鯛の塩焼きの食べ方を競う本取り組みは6年目になった。児童の食べ方も年々上達し、楽しみにしている児童も多い。学級の中で一番きれいに食べた児童を表彰し、廊下に写真を掲示している。

3. 豆つかみりレー

6年生が企画し、縦割り班で実施した。一人一人の箸の持ち方を教員が見て、正しく持てた児童に認定証を渡した。

4. 給食委員会作成のDVD視聴

給食委員会が「箸を正しく持とう」という劇を作成しビデオに撮り、各クラスで視聴した。楽しく分かりやすいDVDで好評だった。



☆研究の成果と課題

「豆つかみりレー」で、正しい箸の持ち方と認定された児童は、55パーセントだった。1学期の調査より正しく持てる児童が増えた。しかし、まだ半数しか箸を正しく持てる児童がいない。今後は、毎日の給食の時間に箸の持ち方を意識する習慣をつける必要があると考える。

令和元年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名および校長名 小浜市立雲浜小学校 校長 鳥居 涼子
☆所在地 小浜市城内2丁目3-9
☆教員数及び児童数(学年別) 教員数 15人 児童数 193人
(1年 28人 2年 44人 3年 27人 4年 30人 5年 34人 6年 26人 特別支援 4人)

☆学校の特色や児童の実態

本校は学校教育目標「たくましく 心豊かな 雲浜の子」の下、「つけたい力を明確にした単元構想を基に、深い学びにつながる対話的な授業を追求する」を研究の重点課題とし、小浜市の「授業力アップ」研究グループ代表校として、授業研究に力を入れてきた。また、各行事等の取り組みや学級での活動を通して、子どもたちが主体性を発揮しやすい場を作り、より学校教育目標に近づいていける活動が展開できるように工夫している。その様な中で、子どもたちは同学年や異学年での協働意識が高く、高い目標を持って学び合い、粘り強く高め合う気風が育ってきており、授業や各行事に向けての取り組みだけではなく、全国学調や県学調に向けての取り組みにもこの力は活かされている。併せて、教職員も「チームうんぴん」を意識し、どのような場合においても教職員相互の充実した取組のために、連携・協力できる協働体制を構築するように努めている。

2 基礎学力向上対策事業

☆研究課題

全国学力調査の取り組みやその結果からは学習に真摯に向かう児童の姿が見られた。基本的な問題の正答率も高かった。しかしながら、算数においては、式の意味を説明したり、計算の仕方を解釈したり、変化の理由を推察したりといった問題に難が見られ、教科の本質につながる概念の理解を育成する必要があると考えた。そこで今年度は、昨年度に引き続き「単元構想図を用いた資質能力の明確化」に加え、「教科の本質につながる中心課題」についての研究も進めた。

☆研究概要

教科書を読めば分かる、決められた答えを求めることに終始する授業からの脱却を目指し、「教科書レベルを超える問い」とは何かを考えて、公開授業と授業研究を行った。「教科書レベルを超える」というのは、決して教科書に出てこないような難しい問題を与えることではなく、いかに「教科の本質に迫らせるか」ということである。それにはまず、その教材で育てるべき資質・能力が何なのかを考える必要があり、以前に増して素材研究が大切になってくる。授業を組み立てる以前の段階で、全員で話し合うことで、様々な視点を得ることができ、そこからその教材でしか培えない力を見いだすことができた。それは単元構想や授業構想に非常に役立ったと考える。

☆研究の成果と課題

県学力調査の結果からは、概念理解や思考を必要とするB・C問題の正答率が県平均を大きく上回り、一定の成果が見られた。何より、「何を考えさせるべきか」を常に考える教師の姿勢と、「うーん」と頭を悩ませる子どもの姿が多く見られるようになり、本校が目指す「子どもも教師ものめりこめる楽しい授業」に少しずつ近づいているように感じる。ただ、より深い学びを求めるには、必要な情報を精査して伝えたり、多角的に考えたり、答えを吟味したりといった論理的な思考の育成が必要である。どのようにそれを育成するかをさらに研究していかななくてはならない。

3 ふるさと小浜 MIRAI 事業

☆目標

郷土の理解と愛着を深める体験的・創造的なふるさと学習を展開し、ふるさとを愛し、明日のふるさとを創造しようとする心を育てる。

☆研究概要

今年度、6年生では5月22日と29日の2日間に渡り、鯖街道体験学習を行った。約40kmの険し

い峠道を歩いた体験を通して、小浜市のいづみ町から、日本海の高産物を都に運び、小浜の繁栄を支えた先人の思い、そして、日本遺産にも選ばれている鯖街道の歴史を学ぶことができた。さらに、鯖街道の終着点である出町杣形商店街を校区としている京極小学校との交流に向けて、京極小学校の児童に小浜市についてのアンケートを実施した。終着点の京極小学校では、鯖街道や小浜市のことが予想以上に知られていない結果に、「京都の終着点の学校に、鯖街道の良さを伝えたい」という思いの高まりが見られた。また、「福井県小浜市について知っていることは何か」「知りたいことは何か」という結果を分析した上で、ウェビングマップを活用し、「小浜市の魅力(＝楽しさ)を伝えるパンフレットを作る」という編集方針を定めることができた。国語科の学習「書くこと」とも関連し、鯖街道を中心とした小浜市の良さをまとめたパンフレット「宝の道」を作成し、京極小学校の児童にプレゼントした。

☆研究と成果と課題

先人の思いや、鯖街道の歴史について体験を通して学ぶ貴重な機会であった。また、他県の小学生にとったアンケートの結果が、「自分たちの愛するふるさと小浜のすばらしさを伝えたい」という意欲につながった。魅力ある活動にするためには、多くの方々のつながりや準備が必要であり、多忙な中で、どのように時間を生み出していくのかが今後も大きな課題である。

4 人権教育

☆研究概要

「みんなの笑顔のためにできること」のテーマのもと、4年生では福井国体車いすバスケット福井県代表選手との交流、校内でのアイマスク体験や車いす体験などの福祉体験を行った。これらは、国語科の「だれもがよりよく関わり合う」学習ともユニットを組み、福祉に関連した自分の課題設定や説得力のあるスピーチにもつなげることを狙ったものである。

☆研究の成果と課題

車いすバスケット代表選手が競技や仲間との出会いを通して、前向きに生きている姿に感銘を受けている児童も多かった。特に、車いす操作や上半身だけでのシュートの難しさは体験をしないと味わえないものである。また、さまざまな体験活動や他教科との関連をはかることでより深い学びにつながった。これらの活動を通して、相手の立場に立って考え行動しようとする心情を高め、違いを受け入れ互いに認め合うことの大切さに気づかせることもできた。

ただ、魅力ある単元構成にするためには、多くの方々とのつながりが必要であり、多忙な中で準備に時間がかかることが課題である。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

＜小浜の特産品である箸に関する取り組み＞

今年度は5月の箸に関する調査を受けて、給食委員会を中心に箸の使い方についての取り組みを行った。活動として全校集会の場で正しい箸の使い方について発表を行い、全校児童に正しく美しい箸の使い方を説明した。また2月の授業参観では、5年生が箸に関する授業を行った。小浜の伝統工芸品である若狭塗り箸を作る職人さんについての学習を導入に、箸のマナー、豆つかみリレーを通して箸を正しく美しく使うことへの関心を高めることができた。授業参観でこの学習をすることで小浜市では箸の使い方に重点を置いて取り組んでいることを保護者に知っていただく良い機会になった。

☆研究の成果と課題

5年生の児童からは「箸を作った人が『作ってよかった』と思えるような使い方をしたい。」というような振り返りが多く見られた。給食の時間でも箸を正しく美しく使おうとする姿が見られるようになった。箸の使い方やマナーに関しての授業はまだ全クラスで行えてはいないが、各クラスの実態に応じて、全学級で箸の使い方の授業を今後行っていきたい。また、全校で日常的に取り組める活動があまりできなかったのも、来年度は箸の体操など日常的に取り組める活動を行いたい。

令和元年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名： 西津小学校 ☆校長名： 岡本 悟
☆所在地： 小浜市北塩屋 18-19 ☆教員数： 13 名
☆児童数： 179 名

(1 年 34 名, 2 年 23 名, 3 年 27 名, 4 年 32 名, 5 年 24 名, 6 年 30 名, 青空 6 名, マイル 3 名)

☆学校の特色と児童の実態：

「かしこく やさしく たくましい 西津の子」を学校教育目標に掲げ、『温かみのある学校・活力のある学校・地域に根ざした学校』をめざしている。今年度は、「3 S 学習を実践し、主体的に学ぼうとする意欲・態度を育てる」と「気持ちのよいあいさつができ、自他ともに大切にできる児童を育てる」を重点課題として取り組みを進めていった。児童は明るく素直でよく遊び、縦割り活動や異学年交流活動も盛んに行われており、他学年と仲良く交流できる。一方で、自分の考えを伝えることが苦手な児童も多い。

2 基礎学力向上対策事業

☆研究課題

どの教科においても、長文から伝えたいことを読み取る問題において個人差が見られた。また、文章の構成を読み取れていなかったり、時間が足らずに最後の問題まで取り組めていなかったりするという課題も見られた。そこで、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の土台となる基礎的・基本的な知識や技能の定着をより確実なものにすること、自分の考えを話したり、人の考えを聞いたりする活動を推進し、思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養っていくことの2点を中心に取り組んだ。

☆研究概要

基礎的・基本的な知識や技能の定着をより確実なものにするため、日課の中に15分のドリルタイムの時間を設け、漢字や計算などの基礎的・基本的な計算を行ったり、短作文や視写などで書くことの習慣化を図ったりしてきた。また、単元末テスト等で、重要事項の確実な定着を図った。さらに、学期末には学期末テスト（前学年・前学期＋今学期の内容）を行い、児童の定着度を把握し、授業改善に取り組んだ。また、児童が主体的に学習に取り組む態度を育成するため、授業においては、対話やふり返りを大切にした授業を心がけるようにした。さらに、指導者のコーディネート力を磨くために各自年1回の授業公開や授業研究会、研修等を活用して力量アップを図った。

☆研究の成果と課題

2 学期末テストでは85%以上の児童が合格した。また、不合格者に対しても、再テストや個別支援を行い、最終的に全員が合格ラインに到達することをめざしてきた。今後は、「ふり返りの視点」を教員が意識して取り組むことで、さらに表現力の向上にもつながっていくであろうと考える。4 月実施の全国学調も12月実施の県学力調査（SASA）でも、本校は県平均を上回る好成績を残すことができた。

3 ふるさと小浜 MIRAI 事業

☆研究の概要

今年度も引き続き、「西津やうちのシルバーカフェ（いぶし銀の会）」との交流を全学年が行った。交流は3年目となり、昨年度の地域の先輩の方々との会話や遊びを重視するスタイルを中心に行いつつ、リコーダーや詩など学習している内容の発表も行った。児童は、地域の先輩の方々との交流することに慣れてきており、シルバーカフェに行くのを楽しみにしている児童の声も聞かれる。また、各学年の生活や総合的な学習のテーマにちなんで、昔の遊びや学校行事、西津の地名や祭りの由来、西津の海の特徴などについて見たり、聞いたり、ときには体験させてもらうことができた。フィールドワークに関しては、西津にたくさんあるお地蔵さんに注目し、「お地蔵さんマップを作ろう」という目標をもたせ、西津の地域の特徴をつかませようとした。見つけたお地蔵さんは、写真に撮りルートマップに、お地蔵さんの特徴を書いた付箋と一緒に示し、学びの足跡がわかるようにした。

☆研究の成果と課題

学校と地域の架け橋の一つとして、シルバーカフェとの交流は昨年度より定着してきていると感じる。児童は、これから年齢を重ねるごとに、初対面の人や年齢が異なる人、西津以外の出身の人と交流することが増えていくだろう。そのうえで、小学校のうちに先輩の方々とかかわる経験や西津という地域の歴史や特徴を教えてもらえる機会がくれたことは、児童にとって大きな財産となった。継続的に取り組んでいく中で、「人と交流するのが楽しい」と感じている児童が増えていることも成果である。フィールドワークでは、目標を明確にして臨んだ、縦割り活動班では、目標に対する理解や様々なお地蔵さんに対する価値の見出し方に差が見られ、児童たち中心では西津という地域の特徴まで探究が深められなかった。今後は、フィールドワークの目標や在り方を見直し、より児童

が主体的に地域とかかわっていけるように工夫する必要がある。一昨々年度のふるさと MIRAI 事業をきっかけに地域のまちづくり協議会が中心となって立ち上げた「西津やうちのシルバーカフェ（いぶし銀の会）」との交流を全学年が行った。シルバーカフェとの交流は 2 年目となり、昨年度は学習内容を発表するスタイルが多かったが、今年度は会話や関係づくりを重視する交流スタイルが増えた。また、昨年度は西津の伝統産業である「若狭塗り箸」にちなんで、箸の使い方教室が全学年で開かれ、児童にとって地域の特色や魅力を確認できる機会となった。前述のフィールドワークを通して、ふるさと西津の地理的特徴や、文化面、人々に目を向ける機会をつくった。見つけたものをマップに示し、視覚的に足跡がわかるようにした。

4 人権教育

☆研究概要

（１）人権週間にて

1 2 月 3 日から 9 日の校内人権集会の前後に、それぞれの取組を行った。

①人権をテーマにした読み聞かせ：毎週火曜日にお世話になっている読書ボランティアの方に、

1 2 月中は、各学年に応じた人権をテーマとした読み聞かせをお願いした。

②各委員会による取組：委員会の時間に話し合い、それぞれの委員会に応じた取組を行った。

③各学級での取組：人権を守るための取組を話し合っ、実施した内容を人権集会で発表した。

④人権集会：校長先生の人権に関するお話を聞いて、各学級の取組を発表した。

（２）職員研修にて：

①「世界人権宣言」について

条文について読み合わせをして、学級経営や日々の活動の中から気づ

いたことについて話し合った。

②「人権チェック」について



☆研究の成果と課題

人権週間では、多方面から人権についてアプローチをする機会をもったため、相手のことも自分のことも大切にする児童が育ってきていることを感じる。また、みんなで仲良く学校生活を送るためにどうすればよいかを、それぞれの学年に応じて考えることができ、よい活動であったと考える。しかし、時間が経つと人を傷つける言動が見られるようになるため、繰り返し行うことが大切である。また、学級によって、教員一人一人によっても人権に関する考え方や指導についてばらつきがみられるため、来年度は、人権に関しての外部講師を招聘して研修を行ったり、人権に関する授業を年間でそろえたりしながら、学校としての人権教育の質を高めていきたい。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

①食事づくり～家族のために働こう～

家族への帰属感や自己有用感を高める取り組みとして、本年度は年間 5 回の「お料理日記」に取り組んだ。食事に関するお手伝いを「レベル 1」に、食事の計画・調理・片づけまでを一人で行うことができたなら「レベル 4 クッキング」として位置づけた。

② お箸体操

箸を正しく持つことをめざして、2 学期から合掌の前に「お箸体操」を行うことに取り組んだ。1 学期に栄養教諭より指導を受けた内容を、「1 本だけを「三点持ち」で持って動かす」「もう 1 本を入れて動かす」の 2 段階に分けて給食委員の声かけで毎日行った。

☆研究の成果と課題

2 月中旬の時点で、児童に次のような意識調査を行った。

給食を食べているときも「お箸体操」を意識している	59%
家の食事でも「お箸体操」を思い出している	25%
「お箸体操」を始めてから箸の使い方がうまくなったと思う	59%
家の人に「お箸体操」のことを話したことがある	28%

全員で、食べる前の落ち着いた状態では正しく箸を動かせる児童は増えたように感じている。しかし、いざ食べ始めると食事に夢中になったり、時間

に追われたりして箸の持ち方が乱れてくる。調査の結果から児童もそれを自覚していることがわかる。児童の主観ではなく、1 学期末に担任が確認したときよりも「箸を正しく持てる」児童の数は増えており、毎日数十秒であるが、「正しく箸を持つことを意識する」だけでも改善することがわかった。学校での取組を家庭へ伝え家庭と連携しながら「正しい箸の持ち方の定着」を図り、「習慣化する」手だてを考えていくことがこれからの課題である。

2019年度 研究成果報告

1 学校の概要

- (1) 学校名及び校長名 小浜市立内外海小学校 音頭 伸哉
- (2) 所在地 小浜市阿納尻45-9
- (3) 教員数及び児童数 男5名、女6名 計11名
- (4) 学校の特色や児童生徒の実態

児童数	1年	2年	3年	4年	5年	6年	バトン	合計
男	9	3	10	6	7	4	1	40
女	9	7	8	4	7	7	1	43
合計	18	10	18	10	14	11	2	83

本校は、市北部、内外海半島の海岸沿いに面する14集落を

校区とする。ユネスコスクールとして、身近にある自然に目を向けて環境問題を考えたり、地域の人との交流を通して生き方を学んだりして、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育（ESD）に取り組んでいる。また、「授業力アップ」研究推進校として取り組んできた実績を活かしながら、主体的に学び合う授業を目指し3S学習を軸として取り組んでいる。明るく素直で、誠実に努力する子どもが多いため、少人数学級の利点を生かしながら子どもの活動を十分に保障した教育活動を進めている。

2 基礎学力向上対策事業

- (1) 研究課題「授業コーディネート力向上による対話的な学びの実現」
- (2) 研究概要

研究主題を「志を持って、主体的に学び合う子の育成」～対話的な学びの実現を通して～とし、育てたい資質・能力を明確にして単元を構想し授業コーディネート力を向上させることで、3S学習で培われた児童の主体性をより伸ばし、主体的に学び合うことのできる児童の育成につながると考え授業改善に取り組んだ。

①3S学習の徹底から発展への挑戦

- ・「時間になったらする仕事」のルーティン化から本時のねらいに即した活動へつなげ、さらに3S黒板を活用して、「新しい仕事」のスタートを児童だけで進められるようにした。

②主体的な学びを支える学習の基盤づくり

- ・朝の脳トレタイム、昼のチャレンジタイム、放課後学習の時間を活用し、全校体制で漢字や計算、暗唱などの基礎基本の定着を図った。

③対話的な学びの視点をもって取り組む教材研究と授業改善

- ・公開研究授業では、授業者だけでなく全員で教材研究、指導案検討を行うことで課題意識を明確にし、授業を参観する視点を定めて臨めるようにした。



(3) 研究の成果と課題

教員の成果としては、目指すべき児童像の守破離を共通理解して、必要な指導の段階を明確にすることができた。また、授業研究では複数学年で同じ教材を使用することで、発達段階に応じた児童の思考や反応の仕方などに気づくことができ、授業改善に役立てることができた。児童の成果としては、低学年も3S黒板の記入を進んでいき、自分たちで学習を進めるという意識の高まりが見られた。高学年では帰りの会で3S黒板を活用して翌日の授業の確認を行ったり、時間になったらする仕事を児童だけで進めたりして、主体的に進めようとする力が伸びた。

課題は、どのような授業を目指していくのかを明確にするために、新学習指導要領で求められている資質・能力等について研修し、「対話的で深い学び」とは何かを共通理解し、本校の児童の姿に照らし合わせていくことである。また、授業を見合う機会を多く設けて、単元構想力や授業のコーディネート力向上につなげていく必要もある。

3 ふるさと小浜MIRAI事業

- (1) 目標 地域の中での「ひと・もの・こと」とのつながりを通して、内外海の食や産業、自然環境についての調査や体験を行い、ふるさとへの愛着を高め、望ましい価値観や資質を育てる。

(2) 研究概要

地域の人々の協力を得て、SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」15「陸の豊かさを守ろう」の実現を目指したESDの取り組みを行った。以下の活動はその一例である。

○ワカメの可能性にせまる（4年生）

県立大学出張キャンパスを活用してワカメの生態について詳しく学んだ。さらに、阿納地区の漁業従事者の協力を得て養殖ワカメの種付けを行った。体験を通して、地域の水産業のやりがいや苦勞にふれることができた。

○定置網漁体験（5年生）

宇久で定置網漁をされている方の船に乗せていただき、漁場や蘇洞門を見せていただいた。様々な種類の魚が多く獲れることが分かり、内外海の海の豊かさについて改めて学ぶことができた。また、マイクロプラスチックについての話を聞き、内外海の海を守る活動に取り組んでいきたいという意欲を高めた。

○志の道整備（6年生）

一昨年度から学んできた「海と山のつながり」から、山の環境整備のため、志の道で植樹を行った。

○「内外海活性化プロジェクト」（6年生）

天然ワカメや5年生が地域で育てた米を修学旅行先の大阪京橋中央商店街で販売し、内外海のPRの一環とした。



(3) 研究の成果と課題

持続可能な社会の担い手としての児童の育成について、地域の方々の理解を深めると共に、地域の人的・物的資源を活用し充実した学習を進めることができた。ふるさと学習を進めていく上で地域の方の協力は必要不可欠である。今後も引き続き児童だけでなく、教職員、学校としても、地域との関係を構築し続けていくことが課題である。

4 人権教育

(1) 研究概要

本校では、人権週間を11月25日から12月6日までと設定し、広報集会委員会が、スローガンと具体的な取り組みを決めて掲示した。実践の中で、特に、全校で取り組んだ振り返り作文と人権集会について述べる。振り返り作文では、家族、友だち、地域の中での自分の生活を振り返り、作文に書いた。人権集会では、低・中・高学年に分かれ、学級の代表が、その作文を読み感想を交流し合った。



(2) 研究の成果と課題

振り返り作文では、低、中学年が「友だちや学級のいいところ」「嬉しかったことや悲しかったこと」、高学年は、「内外海小をよくするために」「リーダーとして」というテーマで書き、発達段階や学級の状況に応じた作文を書くことができた。そして、人権集会では、自分たちの生活に根ざした内容ばかりなので、真剣に聞くことができていた。また、低・中・高学年に分かれていて生活経験が似通っているのも、発表者の言いたいことが理解しやすく、感想交流も活発に行えた。以下に人権集会後の感想を挙げる。

※Aさんの作文を聞いて、Aさんがパオン学級に行くとき、教室を出たら、みんなが「いってらっしゃい。」と、言ってくれるからうれしい、と言っていたから、みんなは、やさしいなと思いました。ぼくたちも体育に行くとき「行ってきます。」と言っているし、先生も「お帰り。」と、言ってくれるのと、にているなと思いました。
※わたしは、人権集会で発表して話し合っ、同じ気持ちの人がいることが分かりました。人権とは、人を思う気持ちなんだなと思いました。これからは、人の気持ちを大切にしていきたいです。
※これからは、自分の気持ちをしっかりと伝えたいと思いました。あと、自分の気持ちを言うだけじゃなくて、しっかりと相手の気持ちも考えたいです。
※言われて気になる言葉は、ぼくとは違う意見がたくさんあって、人それぞれ感じ方がちがうと分かりました。

多くの児童が、一緒に生活していても、言葉にしないと分かり合えないことを実感することができた。また、お互い、友達の良い面を多く発見することができ、自己肯定感を高められたと思う。悲しいことや辛いことも言語化することで、その児童にとって、自分の負の感情を吐露する良い機会になると共に、本音で語り合える仲間作りへの第一歩となった。そして、本校の課題である「コミュニケーション能力を高め合う」ということに、児童自身が気づくことができた。

今後の課題として、人権問題の知識習得だけに終わらずに、日常の言葉のやりとりで、おかしいと思ったことに対して行動をおこせる実践力を養えるような試みや、人権感覚を磨く演習に取り組んでいきたい。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

(1) 活動内容

○食事のマナーの習得について

箸の持ち方に対する意識付けを図るために、箸に関する掲示物を作成した。給食集会では、縦割り班対抗の豆つかみレーと、食事のマナーや栄養に関するクイズを行った。真鯛給食の日は、魚の食べ方を示した掲示物を全学級に配付し、給食指導に生かすことができた。また、職員に対しても、箸の持ち方とその指導法について研修を行った。映像を見ながら正しい箸の持ち方で物をつかむことで、児童に対する指導にも役立てることができた。



○学年ごとの取り組み

パオン	合同学習会に向けての白玉作り、ふるまい
1, 2 年	さつまいもの栽培、収穫、調理、梅もぎ、梅ジュース作り
3 年	梅もぎ、梅干し作り、農場（若狭の恵）見学
4 年	栽培漁業センター見学、養殖ワカメの種付け・収穫・調理
5 年	漁業に関わる方を招いての出前授業、漁場の見学
6 年	地元の食材販売活動、鯖のなれずし作り、ふくいの名産献立作成・実施



(2) 研究の成果と課題

食事のマナーに関しては、「ふくいこども食育チャレンジ」を活用しながら、給食委員発信で様々な活動することができた。低学年では、夏休みの宿題として正しい箸の持ち方の練習に取り組んだ。練習することで正しく持てるようになった児童もいるので、低学年から段階的に取り組んでいきたい。また、学級通信や給食だよりで周知することで、家庭でも食事のマナーについて考える機会をもってもらえるように取り組むことができた。低学年のさつまいも栽培は、収穫量が少なかったが、山に囲まれた地域ならではの苦労についても学ぶことができた。6年生は、地域の食の達人から学び、自分たちで一からなれずしを作ったことは、伝統を守る人々の苦労や願いを知ることにつながったと言える。全ての学年で内外海の恵まれた環境を食の教育に生かすことができた。今後も、ただ体験するだけでなく、その良さを感じ、ふるさとに誇りを持ったり、自分たちで地域のために行動を起こしたりできるような指導を今後も進めていきたい。

2019 年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名および校長名 小浜市立小浜美郷小学校 校長 前田 良則
☆所在地 小浜市金屋 39-8
☆教員数および児童数 教員 22 名
児童 312 名

R2.2.1 現在

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	いきいき	のびのび
48 名	48 名	52 名	46 名	53 名	50 名	7 名	8 名

☆学校の特色や児童の実態

本校は、松永小・国富小・遠敷小・宮川小の 4 小学校が統合され、今年度 4 月に開校した新設校である。統合により全校児童 312 名となり、小浜市内では最も大きい小学校となった。校区も広くなり、全校児童の約 5 分の 3 がバス通学である。子どもたちは、設備の整った新しい校舎と、広々とした校庭など恵まれた学習環境の中で、多くの仲間とともにいきいきと活動している。

今年度は統合初年度ということで、まずは 4 小学校から集まった子どもたち同士が、児童と教職員が、保護者同士が、また 4 つの地域がしっかりとつながることが、本校の教育活動の基本であると考えた。そこで、学校教育目標には「つながりを大切に豊かな心でたくましく生きる子の育成～新しい仲間と新しい地域で学び、自己の夢の実現に向かって～」を掲げ、研究主題を「新しい仲間と学びをひらく～仲間との対話でつながる子どもの育成～」として、「つながり」をキーワードにして、教育活動を進めている。

2 基礎学力充実対策事業

☆研究課題

今年度、小浜美郷小学校は研究テーマとして、「新しい仲間と学びをひらく～仲間との対話でつながる子どもの育成～」を設定した。新設校である本校の研究は、今年度がスタートとなる。統合された 4 校で取り組んできたこれまでの実践・研究を融合し、連動させていくことで、新しい学びとその深化を生み出していくために、キーワードとして出てきたのが学校教育目標の中にもある「つながり」という言葉である。このキーワードを基に、旧 4 校、旧 4 地区を小浜美郷地区として、新しいコミュニティをいかに形成していくか、または形成されていくかを、実践を通して省察していくこととした。

☆研究概要

新しい学校を主体的につくっていく児童の姿、およびこの学校に携わるあらゆる人・もの・こととのかかわりを通して、児童にどのような資質・能力を培わせていくことができるかを念頭に、授業づくりと夢づくりの 2 本の柱で研究を行った。具体的な実践を積んでいくために 2 つの部会を組織し、研究を行った。

① 授業づくり部会の実践

- 学びの本質、子ども達に培われていく資質・能力の明確化をテーマに、対話を軸にした授業づくりを進めた。
- ・基礎学力の定着を図るための脳トレ（音読、群読、暗唱、百マス計算など）、ドリルタイムの実施
- ・対話の基礎作りのための全校統一した「話の聴き方名人」指標の設定
- ・低・中・高学年グループの自主運営による授業研究会の設定

② 夢づくり部会の実践

- 夢づくり部会では、「美郷をふるさとに」をテーマに、子どもをつなぐ、地域をつなぐ教育活動を充実させる研究を進めた。
- ・地域素材の積極的な活用と地域との交流を推進していくためのマップ作り
- ・探究サイクルを軸にした活動を推進していくための生活科・総合的な学習の時間実践シートの検討と作成
- ・地域とのつながりを生かした学校行事等（遠足など）の企画

☆研究の成果と課題

年度当初の全国学調の結果では、設問の意味が正しく理解できていないこと、文章の要約ができないことが課題として挙げられた。また、SASA の結果からも、問題を正しく読み取ることや、文意や条件を満たした記述することに課題が見られる。授業づくりでは、新出の文章や資料に触れる機会や、条件設定した記述の場面などを意図的に設定していきたい。また、教科等横断的な活動を一層充実させ、総合的な学習の時間を核にした活動を充実させていきたい。そうした意味で、授業づくり部会と夢づくり部会の実践の融合が今後の目標となる。1 年目ということもあり、すべての活動を一からつくり上げているため、なかなか前に進んでいる実感は持てていないが、個々に積み上げた授業実践の省察から見出された「学び」とそれを支える「コミュニティの形成」の発展性と相関性を、実践事例を基に明確にし、発信していきたい。そのことにより、今後、地域と結びついた協働実践研究へと発展させていくというビジョンで今後も研究を積み重ねたい。

3 ふるさと小浜 MIRAI 事業

☆目標

地域の「ひと・もの・こと」との関わりを通してふるさとへの理解を深め、ふるさとに生きる意欲とふるさとの未来を拓く夢を持つ人材を育成する。

☆研究概要

『ふるさとに誇りを持ち、ふるさとの未来を拓く志を持った児童の育成』～6 年の取り組み～

【ふるさとへの誇りを高めるために】

開校 1 年目での 6 年生という特質上、まずは 4 地区の良さをお互いに知り合い共有することが大切だと考えた。そのことが児童同士のつながりを深め、4 地区を美郷地区としてつなぐためにも有効だと考えた。5 年生までに学んできた地

域の良さを紹介し合い、児童がお薦めする4地区の各箇所校外学習を行った。4地区の素晴らしさを実際にたくさん見て学んだことで、美郷地区には小浜を代表する神社仏閣が多くあることに気づくことができた。

【ふるさとの未来を拓く志を持たせるために】

① ふるさと小浜の課題を考える

小浜の良さを知ると同時に、小浜の課題（人口問題や拉致問題）について考えた。特に拉致問題では課題を自分事として考えられるよう、拉致現場の見学や拉致被害者との交流の機会を多く持った。このことで拉致問題に主体的に向き合える児童が増えた。自作のブルーリボンとポスターを作って拉致問題解決を市民に訴えるという活動まで児童の志を高めることができた。

② 学びをまとめ、自分たちの思いを発信する

3学期は、これまでの学習を振り返り、ふるさとと自分との関わりを考えさせる。3月にはお水送りに参加し、中松明にふるさとへの思いを書き入れて鶴の瀬まで運ぶ予定である。小浜で最大の神事であるお水送りに参加して自分の思いを発信する経験は、いつまでも児童の心に残り、今後のふるさとへの主体的な関わりが期待できる。

☆成果と課題

<成果>

地域や外部の方との関わりを多く持ったことにより、児童は、ふるさとへの誇りや、ふるさとを良くしていきたいという強い思いを持つことができた。特に拉致問題啓発運動に参加して、主催者の方から感謝の言葉を言われたときの児童の嬉しそうな表情は印象的だった。学習の中で自己有用感を高める経験は、ふるさとの未来を拓く大きな原動力になると思う。

6年生のふるさと学習では、地域貢献まで発展できるような単元構成が大切だと改めて感じた。

<課題>

開校1年目で、4地区のことを改めて学ぶことから始めるというカリキュラムを作成したため、小浜市全体に学習を広げるという面では、時数の確保が難しかった。来年度は、系統性を基にカリキュラムを見直す必要がある。

4 人権教育

☆研究概要

<拉致問題啓発に向けた取り組み>

6年生は、5年生の時に拉致被害者である地村保志さんによる話を聞いており、拉致問題を知らない児童はいなかった。しかし、自分たちとはかけ離れたところで起こった出来事であるという意識があり、自分事としてとらえることは難しいと感じていた。そこで今年度、拉致問題についてより理解を深め、自分にできることは何かを考えていく学習を行った。救う会会長の森本氏に、実際の拉致現場で話を伺ったり、授業で友人が突然姿を消してしまったときの心情を聞くなどして、児童は拉致を決して許さず、問題を風化させないために、拉致問題にどのように向き合っていくのかを考えた。家庭で拉致問題について話す、街頭の署名活動にも参加するなど主体的に考え、行動に移すことができた。

☆研究の成果と課題

人権教育は多岐にわたる。仲間作りや障害者理解、日常の活動において学年に応じた日々の取り組みをしてきた。その中で、拉致問題については、聞いたことはあるが児童にとっては自分事の問題ではなかった。今年度、6年生が拉致問題について学習したことにより、拉致問題も人権問題であることを深く理解し、自分たちにできることは何かを考えることができたことは、大きな成果であるとする。また、取り組んだことを人権集会で全校に発信したことで、学年に応じた理解ができ大変よかった。今年度のみ活動に終わらず、継続して取り組んでいけるとよいと思う。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

本年度は、4校が統合した開校当初ということで、これまでの各学校の取り組みとこれからの小浜美郷小学校としての思いを調和させた目標を設定した。具体的には、子どもたちが将来正しいマナーを身につけて人々と楽しく会食できること、食に対する感謝の気持ちを高めることを目指し、「食事マナー向上のための取り組み」を行った。

<内容> ○給食委員会によるマナーとはしについてのクイズ

○学校栄養職員によるはしの持ち方の給食指導

○はしの持ち方、魚の食べ方についての職員研修

○おはしトレーニングの実施

○豆つかみコーナーの設置

○おさかなペロリコンテスト

○給食だよりを通して家庭への啓発

○おにぎり給食とマイおにぎりコンテストの実施

☆研究の成果と課題

食事のマナーについては、その意味を知らせることや継続して実践していくことが大切であり、児童が意欲的に取り組めるように工夫した。また、おにぎり作りは、将来の食の自立にもつながり、自分で実践することで食を大切に思う気持ちを高めることができた。

課題としては、食事は学校だけでなく家庭での実践が多いため、家庭との連携は不可欠だということである。今後は、学校・家庭が連携した指導を行っていきたい。



2019年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名および校長名 小浜市立今富小学校 校長 山名 聡

☆所在地 小浜市和久里 29-15-1

☆教員数および児童数

教員数…20名 児童数…1年 54名、2年 48名、3年 53名、4年 46名、5年 38名、6年 47名

☆学校の特色や児童の実態

『すすんでかわり 生き生きとりくむ今富っ子の育成』を教育目標に掲げ、「子どもが主体的にとりくむ授業づくり（どの子も授業に参加する）」「子どもがモデルとなる学校（文化）づくり」を二本柱に、日々の授業をはじめ様々な教育活動に取り組んでいる。学びをより深めるための豊かな体験活動（五感を通した学び）の推進、業間マラソンや一輪車による体力・気力づくりにも力を入れている。子どもたちには、勉強・運動・行事等に主体的に取り組む姿や下学年のモデルになろうとする意識の高まりが見られる。

2 基礎学力充実対策事業

☆研究課題 「自ら学び 豊かに伝え合う子どもの育成」を研究主題にして、算数科を中心に授業研究に取り組み、授業力向上と確かな学力の定着を目指した。研究の重点は引き続き「豊かな伝え合いと振り返り」として、昨年度の学びをさらに深めていけるようにした。

☆研究概要

◎「あ・い・う・え・お」のある授業づくり

<あっ！そうか！（気づき）、ああ～！なるほど！（納得）><いいねえ（共感）>

<う～む？（問い）><えっ？！（問い）><おお！すごい！（驚き）>

[教材分析→模擬授業・検討→研究授業→事後研修]のサイクルで行う授業研究と校外からアドバイザー（福井大学：小林和雄先生）を招いての授業研究会を柱に研究を進めた。

☆研究の成果と課題

〔成果〕「深い学び」を実現するポイントを学べたこと。{①子どもが本気になる（頭を抱えるような）問いを生み出すこと。②分かり合うまで訊き合わせ、教師は対話が進むよう適切に介入すること。③振り返りが不可欠であること。} 授業の中で、子どもたちが、思いや考えを積極的に、豊かに伝え合う姿が見られるようになってきていること。

〔課題〕子どもが本気になる問いを生み出す力を高めること。子どもたちの対話（訊き合い）を促す介入の仕方（コーディネート力）を高めること。

3 ふるさと小浜 MIRAI 事業

☆目標 ○ふるさとの自然・歴史・文化・伝統・人々に触れることで、ふるさとのよさが分かる子を育成する。

○ふるさとに対する愛着や誇りをもつ子を育成する。

○ふるさとのよさを表現し、未来のふるさとを拓く子を育成する。

☆研究概要 [「生活科」「社会科」「総合的な学習の時間」より]

＊1年生活科「秋のあそびやさん」（自然・環境）

地域にある秋のものを使っておもちゃを作り、今富そらのとり保育園の園児を招いて交流した。

＊2年生活科「ぐんぐんのびろ」（食）

地域の方に教えてもらいながらさつまいもを育て、収穫したいもでスイートポテトを作り、感謝祭を行った。

＊3年社会科「のこしたいもの つたえたいもの」（歴史・文化・行事）

外部講師に地域の方を招いて、藁打ちと縄ないの話を聞いたり、しめ縄を作ったりして、交流を深めた。

＊4年総合的な学習の時間「川の水質調査・川流れ体験」「アユの串打ち・実食体験」「台風13号」（自然・環境）

南川の生き物や植物と関わりながら、自然の豊かさや恐ろしさを知り、川との付き合い方を考えた。

＊5年総合的な学習の時間「地域の宝を発掘・提案しよう」（食）

地元野菜と小浜の特産物である焼き鯖を使って、地域活性化のためにサバまんを考案し、商品開発を行った。

＊6年総合的な学習の時間「これからの小浜について考えよう」（食）

昨年度漬けたへしこを、ピザ・もんじゃ・チーズドッグ・グラタンに混ぜて、新しい料理を作り出した。

☆研究の成果と課題

〔成果〕 地域の方との交流体験や自然と触れ合う活動を増やしたことにより、体験に基づく理解ができたこと。

〔課題〕 天候により活動を延期したときの対応が難しかったこと。商品開発時に、生ものを取り扱うことができないことにより、調理の幅が限定されること。

4 人権教育

☆研究概要

本校の目指す児童像の1つ目「思いやりのある子」を目指し、身の回りの偏見や差別の不合理に気づかせ、人権問題を正しく認識するための素地を培うための活動を行った。

①「いじめについて考える」「自他の良いところを認め合う」（1～5年）

絵本「いじめだよ」を使って「いじめ」についての認識を深め、自分たちの行動を振り返る活動、「ふわふわことば」「いいね！さがし」「ほめ言葉のシャワー」などの取組を通して、自己肯定感を高める活動などに学年ごとに取り組んだ。

②「拉致問題について考える」（6年）

「めぐみ」の視聴、地村さんの講座を通して、拉致問題が重大な人権侵害であることを理解し、拉致問題を風化させないために自分にできることを考える活動に取り組んだ。

③「障害者差別について考える」（全校）

一途さんのライブ&トークから、実際に障害者の方からインタビューをして曲を作った思いに触れ、差別や不合理について考えた。さらに自分も友だちも大切にしたいという気持ちを高めた。

☆研究の成果と課題

- ・いじめ問題にしても拉致問題にしても、「自分には関係ない」と考えていた児童が、他人事ではなく自分事として考えることができるようになった。どういう言動がいじめにつながるか、イメージできるようになった児童が増えた。この気づきを、次への行動へ移せるよう継続して指導が必要である。来年度はいじめにつながる言動に対して、具体的な行動が起こせる児童を目指したい。
- ・自己肯定感の低い児童が、自分の良さに気付いたり、友だちの良さを見つけようという意識を高めたりすることができた。温かい言葉や気持ちの交流が、何より自分も友だちも大切にしようという気持ちにつながった。

5 「御食国若狭おぼま」食の教育推進事業

☆活動内容

①食に関する指導の取組

- ・1年生のさつまいもの苗植え収穫体験、2年生の野菜の栽培、3年生の大根作りや若狭塗り箸作り、4年生の南川の学習、5・6年生の郷土食である鯖についての学習など、全学年が外部講師による食に関する指導を通して小浜に伝わる伝統食材や食文化についての理解を深めた。
- ・県の事業である「ふくいので場産学校給食」では、小浜市の特産品である「小浜サーモン」「谷田部ねぎ」や、市の農林水産課と協力して「シカ肉」などを取り入れ、給食時には食材についての指導を行った。

②お招き給食

- ・給食感謝祭に合わせて、給食時に調理員や生産者を各クラスに招き、その交流を通して、食に携わる方々や食べ物に対する感謝の気持ちがもてるよう指導した。

③箸の持ち方指導の取組

- ・給食時間に、各学級で箸の正しい持ち方のイラストを黒板に掲示し、児童の意識を高めた。また、児童一人ひとりに「正しい箸の持ち方カード」を作成し、そのカードを用いて箸の持ち方を指導した。

☆研究の成果と課題

- ・箸の正しい持ち方については、全学級で箸の持ち方指導を実施すると共に、掲示物や給食だよりを通して児童に啓発することができた。また豆つかみコーナーを設置することで興味関心も高められた。しかし、正しく箸が持てるようになるには日々の積み重ねが大切なので、今後は保護者と連携して指導できるよう考えていきたい。
- ・今年度も、外部講師や栄養教諭と連携した食に関する指導を多く実施することができ、ふるさと小浜に伝わる食文化や正しい食習慣について児童に啓発することができた。昨年度の学習も関連させながら今年度の指導を行ったことで少しずつではあるが身についてきているものがあると感じた。繰り返しの指導を大切に今後も食に関する指導を実施していきたい。

令和元年度 研究成果報告

1 学校の概要

☆学校名および校長名 小浜市立口名田小学校 校長 早川 弥生

☆所在地 小浜市中井43-15

☆教員数及び児童生徒数(学年別) 教員数:11名 児童数:90名

学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	あおぞら	合計
在籍者数(人)	12	11	19	13	19	14	2	90

☆学校の特色や児童生徒の実態

南川沿いの山村にある小規模校である。素直で純朴な児童が多く、やるべきことに真面目に取り組める。ただ、少人数で固定化した集団のため、様々な状況を自分で判断して行動したり、自分の意見を人前で発表したり他者と関わったりする力が充分ではないという課題がある。

2 基礎学力充実対策事業

☆研究課題:「聴き合い 学び合い つながり合う子の育成」

全国学力調査の質問紙から、「国語や算数の勉強は好き」と回答した児童が多く、意欲的に学ぼうという学習態度が身についてきていると感じた。しかし、「授業で学習したことを普段の生活で活用できないか考える」においては、肯定的な回答が少なかった。学んだことを活用する点に課題がある。また、数学的な考え方や数量や図形についての知識理解で全国平均を下回っている状況がある。そこで、「つながり合いながら深い学びに向かう」授業改善を念頭に研究を進めた。

☆研究概要

(1) 授業研究の実践

「教材の魅力は何か。」「児童のつまずきそうなところはどこか」等、全教員で話し合い、素材研究を行った。また、講師を招いての素材の見方についての研修も積んだ。模擬授業を実践し、課題の出し方や教師の切り返しなど、深い学びを導く教師の指導力の向上を図った。単元構成・学習過程も検討し、より質の高い授業づくりに取り組んだ。

(2) カリキュラムマネジメントへのチャレンジ

児童の学びを充実させるために、教科・領域をつなげたカリキュラムの充実が大切であると考え、学級経営案の形式を変更した。夏季休業中に1学期を振り返って、その見直しを図り、書き換えを実施した。今年度はQUテストを2回実施し、その結果を考慮しての見直しも実施した。「資質・能力」の育成を志向したカリキュラムマネジメントについては、今後研究していく必要がある。

☆研究の成果と課題

(成果)

教員は、話し合いの深め方、授業のコーディネート仕方について研鑽し、授業に生かせるようになってきている。また、授業を他教科とつなげることができないかという視点で、単元の構成を考えるようになってきた。

(課題)

本校の児童につけたい資質・能力を明確にした上で、素材研究や授業研究をする。さらに、その力を育成するためのカリキュラムマネジメントについて考え、授業の全体構想を立てながら、授業研究を続けていく必要がある。

3 ふるさと小浜MIRAI事業

☆目標

- ・ふるさとの自然や文化に親しみ、歴史、産業、先人の偉業などについて学びながら、積極的に地域と関わっていきこうとする態度を養う。
- ・地域のよさを知り、地域に対する誇りと愛着を持つと同時に、進んで地域社会に参画していきこうという意欲や態度を培う。

☆研究概要

(1) 谷田部ねぎの栽培(3・6年生の取り組みから)

校区の代表的な地場産野菜である谷田部ねぎを、地域の方に教えてもらいながら育ててきた。4月に植え付け、6月に草取り、8月に伏せ替え、12月に収穫をし、谷田部ねぎの生育について学んできた。ねぎ料理体験活動などを通し、学んだことを2月の学習発表会で報告する予定である

(2) 大黒山登山(4年生の取り組みから)

学校の裏山である大黒山に着目した。地域の宝「大黒山」に登り、他の山との比較からよさを考えてきた。小浜山の会の方に協力していただき、3回の登山を体験し、山登りの達成感も味わった。大黒山については、2回登ることで、児童の山に対する思いの変容を感じることができた。その思いから、案内の看板を取り付けるなど、大黒山をPRするための行動を起こすこともできた。

☆研究の成果と課題

- ・地域の「ひと・もの・こと」に触れることで、地域のよさを知り、愛着を深めることができた。
- ・地域の方と直接関わることで、地域社会に参画していく意欲を高めることができた。
- ・学んだことを発信する場が限られており、いろいろな方法で発信していく工夫をする。

4 人権教育

☆研究概要

- (1) 日々の取り組み…自分らしさについて再確認したり、友達のよいところを伝え合ったりする活動。人権作文を聴き、人権に対しての理解を深めたり広めたりする活動。学級で問題が起こったときに話し合いで解決する活動。（全学年）車いす・アイマスク体験や全盲の方からの話を聞く学習。（4年）同和問題や身分差別に関する歴史学習。（6年）
- (2) 人権週間での取り組み…「校内人権デー」を設定し、各学年で人権に関する授業（主に道徳）を実施。人権集会で各学年のこれまでの実践の発表と校長先生の講話。拉致問題 V T R「めぐみ」を視聴し、人権との関わりを理解。（6年）
- (3) 教職員研修…6年生の教科書から、同和問題に関する記述を確認し、どのように学ばせていくか話し合う。

☆研究の成果と課題

12/5を校内人権デーと設定し、全校で人権の授業を行った。全校で行うことで人権の意識が高まった。4年生は国語や総合の学習と連携させながら、福祉学習を行った。体験活動を行ったり障害者から話を聞いたりして共生の意識が高まった。6年生は、身分差別の学習（歴史学習を通して）、肖像権・プライバシー権（SNSの使い方から）、拉致問題（V T R「めぐみ」の視聴）など、現在の課題や今後起こりうる人権問題について幅広く考えることができた。

学級の実態や発達段階に応じて、クラスが仲良くなるためのルール作りや、トラブルを解決に向けた話し合いなどを行った。しかし、児童同士の言葉づかいや、友だちとのより良い関わり方などについての課題はある。今後も継続して指導していきたい。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

今年度は、月1回の食事作りを継続しながら、箸の正しい持ち方を習得できるように取り組んできた。

(1) 食事づくり（キッチン記念日の取組）

月1回の食事づくりにおいては、以下のように取り組んだ。

- ① 毎月各学年1人ずつ優秀賞（取り組んだことを短い、五・七・五の川柳に表現したもの）を選び、校内掲示板に張り出し、校内放送で紹介する。
- ② 給食便りに掲載し、家庭への啓発を図る。

(2) 箸の持ち方習得

箸の正しい持ち方習得に向けては、具体的に4つの活動に取り組んだ。

- ① 箸の持ち方の掲示や家庭への配付物での啓発
- ② 給食委員会による、箸の持ち方講座
- ③ 豆つかみコーナー設置
- ④ 集会での箸の持ち方

☆研究の成果と課題

(1) 食事づくり

成果：ほとんどの児童がしっかり取り組み、提出率は毎月ほぼ100%であった。

課題：保護者の一言コメントの欄が空白であったり、書いてもらうのに時間がかかったりし、保護者への負担を感じた。また、毎月同じ食事を作ったり、簡単な取り組みから向上が見られなかったりと、活動のマンネリ化、意欲の低下を感じる部分があった。継続も含めて、検討する必要があると感じた。

(2) 箸の持ち方習得

成果：掲示物や給食委員会の活動、豆つかみコーナーの設置などにより、箸の持ち方を児童に意識させることができた。給食委員会の活動では、給食時に各学年の教室を周り正しい箸の持ち方を習得する場を設けた。3回の練習を経て、最終回には、正しい箸の持ち方を知り、意識的に直すことができていた。また集会では、自作動画やクイズで楽しく箸の持ち方やマナーを学ぶことができた。

課題：正しい箸の持ち方を習得したとは言え、やはり意識していないと自分の持ちやすい持ち方にもどっている児童が多数いた。7月の調査から半年、1月に改めて、学級担任の目視（忠告無し）で調査を実施したところ、正しく箸を持てている児童の数に変化はほとんど見られなかった。継続的に意識させるとともに、家庭との連携を図らなければ改善は難しいと痛感した。この結果を次年度に生かしていきたい。

1 学校の概要

☆学校名及び校長名	小浜市立中名田小学校	村上 奈保子
☆所在地	小浜市下田 10-1	
☆教員数及び	教員数	6名
児童生徒数	児童数	1年生 3名 2年生 4名 3年生 6名 4年生 4名 5年生 6名 6年生 7名 計30名

☆学校の特色や児童生徒の実態

小浜市の南西端に位置し、四方を山に囲まれた自然豊かな地域にある本校は、地域の協力も得やすく、物的、人的に学ぶことが多い環境にある。地域に根ざした豊かな体験活動ができる基盤があることが本校の強みである。児童は、素直で素朴であり、指導したことを素直に受け止め実践しようとする。教職員は児童一人一人を理解し、共通した認識をもって教育活動に取り組んでいる。日々の授業においては、学習リーダーを中心とした主体的学びの実現に向け、日々実践中である。

2 基礎学力向上対策事業

(1) 研究課題

「自ら学び ともに高め合う子を育成するために～少人数・複式の特性、地域の教育力を活かして～」を研究主題として設定した。本校児童は、固定化された人間関係の中にあるために、他の児童の意見に合わせてしまう、自分で課題を見つけて解決していこうとする姿勢が弱いなどの課題がみられる。そこで学習リーダーを中心としたガイド学習を進め、主体的に学び、互いに高め合おうとする意欲を高めることが、学力の向上につながる考えた。

(2) 研究概要

複式授業においては、必然的に生まれる間接指導を活かし、児童が自分の考えを述べ合い、課題を解決していく過程を大切にしたい授業づくりに取り組んできた。具体的な方策として、リーダーを中心とした複式授業、ゴールをイメージした単元構成、対話的な授業づくり、学習の流れの明確化（指示黒板の活用）などを行ってきた。授業以外では、月末テストの実施や10分間のミニスーパー学習、20分間のスーパー学習の時間を生み出し、基礎学力の向上につながる効果的な時間となるよう工夫してきた。

(3) 研究の成果と課題

指示黒板の活用を通して、学習リーダーを中心に自分たちで学習を進められるようになってきた。また、考えを述べ合う姿勢を大切にできる授業も見られるようになった。県へき地複式研究大会では、「リーダーを中心に子ども達自身で課題を解決する姿、主体的に学ぶ姿が素晴らしい」「今後の教育の有効な手段かもしれない」等の参観者の方々の感想を頂いた。今後も、主体的で対話的な学びが学力向上につながるの信念を持ち、系統性をもった指導を継続していきたいと考える。

3 ふるさと小浜 MIRAI 事業

(1) 目標

ふるさとの自然や文化についての学習や交流体験を通して、ふるさとのよさに気づき愛着を持つとともに、自分たちにできることを考え、地域に働きかけることができる。

(2) 研究概要

今年度も、体験を通して地域の良さを学び、地域に働きかけていく活動を中心としたふるさと学習に取り組んできた。

1・2年生は地域の新しい産業であるミニトマト栽培について学び、県へき複教育振興研究大会の折、参加者の方々に自分たちでラッピングしたトマトを配布しながらPRした。3・4年生は「中名田を元気にしよう大作戦！」と銘打ち、地域の環境美化活動や、高齢者の方との交流活動に取り組んだ。5・6年生は地域の伝統産業である若狭和紙と若狭塗り箸を取り上げ、自分たちですいた和紙で箸袋を作り、その中に若狭塗り箸を入れたプレゼントを修学旅行の奈良公園で外国人観光客に配布しながら、小浜や中名田をPRした。また、全

校児童が思い描く中名田のイメージを歌詞にして、手作りのCD「中名田はいいところ」を完成させた。CDは地域に配布するとともに、地区との合同体育大会や市音楽会をはじめ、校内外を問わず様々な機会に歌っている。

(3) 研究の成果と課題

今年度も、それぞれの学年が体験活動や地域の方々との交流を通して中名田のよさを再発見し、ふるさとへの愛着や誇りを持つことができた。本校のふるさと学習は、「知る→協働する→発信する」という段階を踏んでいるが、これまで高学年が中心になっていた「協働する」「発信する」の活動を中学年・低学年にまで広げた。このことにより、どの学年も発達段階に応じて地域の一員としての自分の役割を自覚し、地域のために具体的に行動していこうとする意欲を育むことができたのではないかと考える。今後、「ふるさと」の範囲を中名田地区以外にも広げていきながら、ふるさとの未来を地域とともに考え、協働し、発信していく学習の充実を目指していきたい。

4 人権教育

(1) 研究概要

お互いの人権を尊重し、よりよい人間関係を築いていこうとする児童を育成するために、以下のような取り組みを行った。

① 学級の人権のめあて作り

各学級において自分たちの学級の人権問題について話し合ってから、それを解決する人権のめあてを設定した。そのめあては人権集会において発表し、学級の人権意識の一層の高揚が図れるように教室に掲示した。

② 友達のよいところ探し

人権集会での絵本「ええところ」の読み聞かせのあとクラスに戻り、星形の付箋にその人のよいところを書いて（クラス全員分）、一人1枚の紙に貼り合わせてカードを作る活動を行った。他者を大切にする気持ちを育てると同時に、自分の良さに気付くことを目的として行った。

③ Q Uテストと教育相談

2回のQ Uテストと結果分析を行い、結果を基に児童一人一人との教育相談で個に応じた対応に努めた。

(2) 研究の成果と課題

キラキラ光る星形の付箋でいっぱいになったカードを見て、自分ってこんなにステキなところがあるんだと思える児童が大勢いた。そのことで、学級だけでなく、学校全体の人間関係が良好になったように感じる。多様な生き方や考え方を理解できるように、外部講師を活用しながら人権教育を取り組んでいきたい。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

(1) 活動内容

<食に関する指導>

- ・全学年、畑で野菜を作り調理実習等をして食した。・地域の方にお世話になり、全校で米作りに取り組んだ。

<箸の正しい持ち方に関する指導>

- ・DVD（市から配布されたもの）をもとに、職員で研修を行った。
- ・ランチルームでの給食時に、栄養教諭や委員会から、箸の持ち方クイズを出したり、食事のマナーなどの説明をしたりした。
- ・学校給食週間の給食感謝会では、DVDを使って正しい箸の持ち方の練習をし、その後豆つかみゲームを行った。
- ・1学期と3学期には、「はし名人になろう!」というチェック週間を設けて箸の持ち方を振り返らせ、正しい持ち方を意識させるようにした。

(2) 研究の成果と課題

1年間取り組んだ結果、「どのような持ち方が正しいのか」は全員が分かり、箸も持てるようになった。しかし、その正しい持ち方で給食時間中ずっと食べることは、なかなか難しいようだ。これからは、箸の持ち方トレーニングなどを取り入れながら、計画的に、継続して指導を行っていきたい。

1 学校の概要

☆学校名および校長名 小浜市立加斗小学校 地村 健一
 ☆所在地 小浜市飯盛59-32
 ☆教員数 男5名 女5名 計10名
 ☆児童数

学年	きらきら	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
児童数	1名	9名	11名	6名	10名	11名	15名	63名

☆学校の特色や児童生徒の実態

本校は小浜市の西部の農村部に位置し、校区内を国道27号線、舞鶴若狭自動車道、若狭西街道、JR小浜線が東西に走る交通量の多い地域である。児童は明るく素直で、真面目な子が多い。しかし、少人数で過ごしているため周りの支援を受けることが多く、自分で考えたり判断したりすることが苦手である。この点を克服するよう「考える力の育成」という教育目標を掲げ重点的に取り組んでいる。

2 基礎学力充実対策事業

☆研究課題

児童の主体的・対話的な深い学びを実現するために、本年度も全教科・領域で「わかる・楽しい授業の工夫と改善」「考えを持ち表現できる力の育成」「学習意欲の向上と基礎基本の定着」を目指し、「つながり合い、高め合う子どもの育成」を研究主題に掲げ、学力向上に取り組んできた。具体的な取り組みは以下の通りである。

☆研究概要

○授業改善の取り組み

- ・1人年2回の公開授業
- ・前期・後期指導訪問の授業研究
 - 身につけさせたい資質・能力、各単元や授業でのねらいの明確化
 - 指導者の「切り返し」の技術向上をめざしたマイクロティーチング（模擬授業）と事後研修の充実
 - 「理想とする振り返り」をイメージした授業展開

○その他の取り組み

- ・嶺南教育事務所との連携
 - 研修講座「授業作りと絆作り～特別でない支援教育のために」に全教員参加
 - 訪問研修「思考力・表現力を育てる学級づくり」
- ・話す・聞く力の育成
 - 朝の会や帰りの会でのスピーチ活動、インタビュー活動や話し合い活動の充実
 - 「加斗っ子言語わざ」話形をもとにした意見交流の活性化
- ・休み明け実力テストの実施
 - 満点賞・合格証表彰を行い児童のやる気と達成感を喚起

☆研究成果と課題

今年度は「ふるさと小浜MIRAI事業」の指定があり、「郷土愛」の育成を中心としたカリキュラム・マネジメントを行った。学校訪問でも、前期に生活科、後期に総合的な学習時間を中心に、子どもに身につけさせたい資質・能力や学習のねらい・目的を明確にした単元構成や授業内容を考えることができた。また、一人年間2回の公開授業では、算数科や道徳科を中心に、教師の切り返しや児童の発言のさばき方に関する事後研修を行った。その結果、補足などの説明や意見などが増えたり、もう一步深く考えた発言が多く見られたりするようになった。しかし、子ども同士の話し合いによる意見の深まりはあまり見られず、次年度の課題である。また、「加斗っ子言語わざ」は話し方に関するものであったが、今後は深い学びに導くための「訊き方」の指導にも力を入れていく必要がある。

3 ふるさと小浜MIRAI推進事業

☆研究内容

○鯉川海水浴場の活用

鯉川シーサイドパークでビーチバレーボール体験とシーカヤック

体験を行い、鯉川海水浴場の有効な活用方法について考えることができた。

○自然や歴史と食の融合



6年生が岡津製塩遺跡について学習し、製塩体験を行った。岡津製塩遺跡をPRするために、塩を使った塩飴作りを企画することができた。天然記念物の蒼島をPRするためのメニューを考案し、マリンプラザで販売することができた。蒼島とくずまんじゅうを融合させた「あおしまんじゅう」も考案し、学習発表会で振る舞うことができた。

☆研究の成果と課題

加斗の自然の豊かさや伝統、歴史を学び、児童は地域への愛着や誇りを高めることができた。さらに、加斗を活性化させPRしていくための方法を考え、学習発表会で提言することができた。今年度の内容や提言をどのように来年度につなげ、広げていくかが課題である。

4 人権教育

☆研究概要

○拉致問題学習

6年生は、社会科の拉致問題の記述と関連してアニメ「めぐみ」を視聴し、感想を交流した。6年生になると内容も理解でき、自分たちの地区で起こった身近なことであると感じ、拉致問題は大きな人権侵害であることを理解していた。

○人権集会

2学期に行った人権集会では、全校で絵本の読み聞かせと演習を実施した。演習は、一つの質問に対して自分で答えを考え、自分の考えが「正しい」「たぶん正しい」「間違っている」「たぶん間違っている」のどれかを決める活動であった。それぞれの考えを詳しく聞き合うことで、お互いの意見の違いを認め合う活動ができた。



☆研究の成果と課題

拉致問題について、子ども達は身近で起こった人権侵害の問題であることをしっかり捉えることができた。大切な問題であり、風化させてはいけない問題でもあるので、これからも継続して取り組んでいくことが大切である。また、人権集会での「ともだち」という本の読み聞かせは、低学年から高学年までわかりやすい内容だったので、どの学年も集中してよく考えながら聞いていた。演習は今年度初めて行った内容であったが、全校で取り組むことができ、お互いの考えの違いに気付くいい活動だったので、来年度も質問を変えながら続けるといいと感じた。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆研究内容

○箸の正しい持ち方の学習

全学年が学活の時間を利用して、正しい箸の持ち方を学習した。DVDを見ながら実際に箸を持って、見たとおり自分が動かしているかを確認させた。DVDを見た直後は、児童も正しい箸の持ち方で動かすことができていたが、実際の食事時になると、これまでの自分の癖で食べる方が食べやすいためか、以前の持ち方にもどりがちであった。そこで、3学期からは、ランチルームでの給食の「いただきます」の前に、給食委員会が中心となって、全員で箸の動かし方の練習を行うようにした。



○給食感謝の会

3学期には、地場産食材提供者や給食調理員をお招きし、給食感謝の会を開催した。花鉢とお礼のカードを一言添えて手渡した。インタビューでは、苦労話やうれしかったこと、児童へのメッセージ等をお聞きした。その後、給食委員会企画による豆つかみゲームや食育クイズを、地場産食材提供者の方々と共に楽しんだ。

☆研究の成果と課題

箸の正しい持ち方指導では、初めはぎこちなかったり、食べるのに時間がかかったりしていたが、徐々に慣れてきて、上手に箸を動かせる児童が増えてきた。今後も継続して根気強く指導を続けていく必要がある。給食感謝の会では、給食が多くの人の努力によって成り立っていることを知るよい機会となり、感謝の気持ちを持って給食をいただくことができるようになった。



1 学校の概要

- ☆ 学校名及び校長名 小浜市立小浜中学校 学校長 山田 康弘
 ☆ 所在地 小浜市雲浜二丁目1-1
 ☆ 教員数及び生徒数（学年別）

学年	1年	2年	3年	特別支援	計	教員数
生徒数	104	120	113	13	350	26

☆ 学校の特色や生徒の実態

本校は学校教育目標「志気高き浜中生の育成～自己を高め 共に学ぶ～」のもと、「つながり合い、豊かに学ぶ集団づくり」を研究主題として教育活動を展開している。生徒は総じて明るく素直であり、落ち着いた学校生活を送っている。生徒会活動などの自治的活動に力を入れており、年間を通して生徒会を中心に縦割り活動による行事運営をおこなっている。また、ノーチャイムでの生活や、全校集会・入学式・卒業式での司会を生徒に委ねること等により、自ら考え行動できる生徒が育ってきている。授業では、学習創造委員会を核として生徒主体の授業づくりに努め、グループやペアでの話し合い活動を積極的に行い、学び合いを深めている。

2 基礎学力向上対策事業

☆ 研究課題 「つながり合い、豊かに学ぶ集団づくり」

関わり合いを柱とした授業づくりの研究を本校は過去4年間の主題としてとりおこなってきた。以前から取り組んでいる「つながり」を意識した学校づくりをさらに発展させることを目指す。本校で伸ばしていきたいと考える「つながり」は以下の通りである。

①生徒間のつながり ②教員間のつながり（同僚性） ③教員・生徒・保護者（地域）とのつながりである。特に本校では、教員間の同僚性は高く協力体制の基盤もしっかりしている。そういった連絡・報告・相談体制を大事にしながら、生徒個々の様子をきめ細かく観察する。本校の課題は、一斉授業の際の発言者の偏りであり、一部生徒の意見で授業が進められる傾向にある。この課題を克服するために、生徒個々が自分の思いを表現できるような学級集団づくりと、生徒の言語活動の充実を課題として取り組む。

☆ 研究概要

（1）授業＋生徒指導の観点

授業を通して生徒に「豊かな心」を身につける工夫をしていく。教材を通して、自分の体験を通して、生徒の心に響く話をしていくことで、生徒に考えさせる時間を設定する。

（2）表現力の育成

グループ学習やペア学習では話すことができる生徒も、一斉授業形態になると話すことを遠慮したり躊躇したりする様子が見受けられる。一斉授業の中でそれぞれの生徒の考えや思いを共有する時間を設定し、学級づくりを主体とした人間関係を形成していきながら、自身の考えを伝えられる生徒の育成を目指す。

（3）教師自身のコーディネート能力の向上

多角的で深く研究・分析された教材から授業展開（特に生徒のつまづき）を予想し、生徒の疑問点から授業を構成していけるような授業づくりを学期に1回程度設け、生徒の変容をはかる。また、本時の課題が、家庭学習の課題や、次時の学習課題となるような授業構成を工夫する。

（4）ノートづくり指導の工夫

板書を美しく写すことに終始するのではなく、仲間の考えや自分の考えを自由にまとめたり、授業での発言を進んでメモしたりするなど、自分のノートを自分なりにまとめる力をつけさせるための指導を行った。

☆ 研究の成果と課題

本校アンケート結果によると「積極的に自分の意見を発表している」生徒の割合は70％である。全員が、学級の中で自信を持って意見を述べられる集団とは言えず、引き続き本校の課題である。ノートづくりについては、「板書以外に考えなどを積極的に書くことができた」割合は、1学期に比べて増加したが70％であった。教科やクラスでの取り組みを工夫し、さらにノートづくりの意欲を高めたい。

3 ふるさと小浜MIRAI事業

☆ 研究の概要

（1）1年生 チャレンジウォーク

当日は天候に恵まれ、ふるさとの美しい景色を心に刻むことができた。各チェックポイントでは、地域の方の声援をうけたり、PTAの方に協力をいただいたりすることができ、自分たちの活動がたくさんの人の支えで成り立っていること、地域の方との繋がりを実感することができた。学級の仲間と共にふるさと小浜の良さを再認識しながら、学級の絆をより一層深めることができた。

(2) 2年生 職場体験、修学旅行学級別活動を通して自己の生き方を考える

働くことの意義を考え、職業に関する様々な学習を展開した。なかでもふるさと仕事塾の講演や、夏季休業中の3日間の職場体験では、地域の幅広い年代の方から地域で働くことの良さや地域への思いを聞かせていただき、自己の将来を見つめその筋道を考えるきっかけになった。また、修学旅行に向けて、地域コーディネーターの協力得て、地域の特産品や販売のノウハウについて学習した。当日は、東京都内の商店街や観光地において学級別に販売活動を行い、地元商店街の方々や観光客の方々に、小浜の商品を販売したり、小浜の食文化や景観、文化財などを紹介したりすることでふるさと小浜をPRする予定である。

☆研究の成果と課題

1年生のチャレンジウォークは、小浜の自然の美しさや地域の方々の支えを実感したり、仲間とともに困難克服したことの達成感を感じたりでき、大変有意義であった。1年生だけの行事としたことで事前準備や当日の安全管理など運営面でコンパクトにまとめることができた。

2年生は職場体験を通して、小浜で働く人々や小浜の産業、特産品など地域の特性を見つめ直す機会となった。ふるさとに対する認識や愛着をより深め、その後の修学旅行の学級別活動に繋げていきたい。

3年生は、個人的な課題への取り組みが中心となるが、義務教育最終年として、小学校から積み重ねてきたふるさとに関する知識や思いを地域に返せる学習としていきたい。

4 人権教育

☆研究概要

「人権意識を啓発する教育を推進し、人間尊重の精神を育成する」という人権教育の目標のもと、1年間人権教育を推進してきた。人権教育の要は日常生活指導の中にあると考え、生徒の小さな言動についても見逃さないように心掛けた。また、第3学年の生徒が拉致問題について事前学習をした上で、拉致被害者である地村保志さんの講演を聴く取り組みを行った。

(1) 教職員に対する人権研修

発達障害に関する基本的な事柄を理解するための研修の場をもった。困り感をもつ生徒に接する際、その生徒にとって最適な指導・支援をするためにも、その特性を理解しておくことは必要不可欠なことである。生徒一人ひとりの自己肯定感が高められるよう指導することを確認した。

(2) 人権週間の取り組み

人権集会では、夏に全校で取り組んで応募した人権作文の中から、福井県大会で特別賞を受賞した生徒の作文を全校生徒の前で朗読してもらった。その内容は障害をもつ身内について述べたもので、聴いている生徒の心に強く訴えかけるものだった。その後『みえるとかみえないとか』の読み聞かせをし、人にはいろいろな違いがあり、その違いを認め、補い支え合って生きていくことが大切だという講話を行った。

☆研究の成果と課題

講演で拉致被害者の生の声を聞くことは、生徒にとって「自分に何ができるのか」を考えるきっかけになった。今後は、講演を生かすためにも事前・事後指導の改善をしていかなければならない。また、多様性や他者との違いを受け入れていこうとする雰囲気はできつつあるが、今後更にその認識を深め、互いに尊重できるよう取り組みを進めていかなければならない。

5 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

ふるさとの食については、日々の学校給食の中でお便りや放送での一口メモ等で意識をもてるようにしている。また、ふくい在地場産学校給食事業でのふるさと給食の提供では、健康委員の活動として説明やクイズを行った。箸の持ち方指導では、まず校内において教員への研修を行った。そして、各クラスで健康委員によって、正しい箸の持ち方や魚の食べ方について説明を行い、基礎的なところから取り組んだ。そして、魚の食べ方コンテストを実施した。

教科等の中でも家庭科の授業をはじめとして、1年生での郷土新聞づくりや2年生の修学旅行での販売活動においても食育に繋がりをもたせた。

☆研究の成果と課題

委員会活動で生徒による学級での指導を入れ、食に関する理解がより深まった。また、教員も含め改めて箸の持ち方や魚の食べ方を見直すきっかけとなった。

特に2年生では、魚さばき体験・家庭科の食分野の授業・修学旅行における販売活動と繋がりがあり、食育が充実していた。今後は、他学年での食育の充実を図りたい。

令和元年度 研究成果報告

1. 学校の概要

- ☆ 学校名および校長名 小浜第二中学校 西川 芳夫
- ☆ 所在地 小浜市後瀬町8番10号
- ☆ 教職員数および児童生徒数 教職員数 32名 生徒数 1年：136名、2年：143名、3年：130名
- ☆ 学校の特色や生徒の実態

校区に5つの小学校を有し、市内では最も規模が大きい。学校教育目標「社会に貢献できる自主協同の精神の育成」のもと、「愛される二中学生へ向上・つながり・勤労～」の生徒育成を目指している。落ち着いた雰囲気の中で、生徒は学習や生徒会活動、部活動に励んでいる。

2. 基礎学力充実対策事業

☆研究課題

学力検査から本校生徒の学力は上向きであるが、まだ十分とはいえない。そこで、各教科で育成すべき資質能力を明確化し、「確かな学力を身につけた生徒の育成」をテーマとして実践をすすめることとした。

☆研究概要

①朝学習・朝学習コンテストの充実

今年度は、5教科を対象に朝学習と朝学習コンテストを計画的に実施した。特に数学については、管理職と副担任がその時間に教室に出向き個別指導を行うようにした。即時に評価をしていくことで、生徒のやる気を引き出すと共に、生徒との距離を縮めることにもつながっていった。朝学習コンテストについては、上下半期で実施し、5教科の点数に応じ賞状をわたしたり、満点の生徒の名前を掲示したりするなどして、学習に関して全体の場で評価する機会を多くするように心がけた。

②放課後学習会の充実

英語・数学の学力が低位な生徒に絞って、放課後補充学習を実施した。基礎的な問題をドリル練習したり、補充授業をしたりした。指導に当たる教員確保の難しさはあったが、できるだけ多くの教員が関わるようにした。生徒に多くの教員が関わり、学力を最低限保証することで、生徒の学習への意欲を持続させることができた。

③家庭学習の習慣化

テスト前の家庭学習の徹底するため、学習への道（連絡帳）のテスト計画表を生徒が計画する時間を確保し、担任の指導のもと計画をたてさせた。また、毎日計画通り学習が進んでいるかチェックと指導を行った。計画を立てて学習をすすめることの有効性について、学校便りで家庭にも伝えるとともに、協力をお願いした。

☆研究の成果と課題

「生徒の学力向上」に向け様々な取り組みを進めるとともに、教員研修として、一人2回の公開授業に取り組んだ。学校評価アンケートの結果から、分かりやすい授業づくりを意識して実践に努める本校教員は100%である。しかし、自分が授業内容を理解していると感じている生徒の割合は78%と、教員の意識とは差がある。教員がさらなる授業力向上に向け、授業研究を進めていくことが必要と考える。学校全体としての共通の取り組みと、教員の授業力アップへの取り組みが同時進行することで、生徒の確かな学力がさらに身につくように研究を進めたい。

3. ふるさと小浜 MIRAI 推進事業

☆目標 ・ふるさとの産業や歴史について学習し、ふるさとに愛着を持ち、未来を考えようとする生徒を育成する。

・地域の人とのふれあいを通して、生き方を考えさせる。

☆研究概要 3年生 小浜のまちづくりとそれに携わる方々の考えや思いから探究学習を進めた。将来への展望や自分の生き方について考え、それらを後輩や地域の方々に紹介するなどした。

2年生 「二中の先輩に学ぶ講演会」を開催し、地域で働く人々の思いに触れ、自分の生き方を考える学習を行った。③地元企業での3日間の職場体験活動を行った。

1年生 地域で子育てをされている母親と交流や、地元の助産師さんの講演を通して、命の大切さについて探究するとともに、地域とのつながりについて考えた。

☆研究の成果と課題

①小浜市の現状や課題を知り、二中祭で発表することを通して、小浜へのふるさと意識が高まった。しかし、学級やグループによって、今後どうするべきかの提案の深まりの差が大きくなったことが課題である。

②二中の卒業生である講師と交流することで、生徒が働くことをより身近に感じ、自分の将来と結びつけて捉え

ることができた。学習の成果を発表する場に講師の方を招待し、助言をもらったりできるとよかった。

③地元企業の体験を通して、小浜の産業についての理解を深め、地元で働く方々の思いを知ることができた。

④地元の助産師さんや子育てをしている母親との交流を通して、生徒一人一人が家族だけでなく地域の方々から支えられて成長してきたことを感じる事ができた。

4. 人権教育（研究概要・成果）

☆研究概要

（拉致被害者の人権を考える）

3生はDVD「めぐみ」を視聴し、拉致についての概要を学習した後、拉致被害者である地村保志さんを講師にお迎えして講演会を開いた。講演では、まず「拉致される」ということがどういうことなのか説明された。その後、拉致された当時の状況や、北朝鮮での生活の様子など、実際の体験に基づいた生の声を聞くことができた。

☆研究の成果と課題

講演後の生徒の感想の中には、「拉致問題はまだ終わりではない」「まだ拉致されている方や、苦しんでいる家族の方達がいることを改めて考えると、早く解決してほしい。」「拉致は『突然自由を奪われること』である」「拉致が自分たちのとても身近で起きていたので、『ぞくっ』とした」「拉致問題のあることをこれからも忘れず、早く解決されることを願っていきたい。」等の感想が見られた。拉致被害者の地村さんの話を直接お聞きすることができたことで、拉致問題に対する認識を生徒も教員も再度確認できた。今後も拉致問題を考える取り組みを継続し、拉致問題を解決まで風化させないようにするとともに、人権の視点から拉致問題を職員全員で研修し、さらに理解を深めるようにしたい。

5. 「御食国若狭おばま」食の教育推進事業

☆活動内容

2年生の魚さばき体験では、今年度は魚の食べ方もDVDを使って教えていただき、箸のマナーについて例年以上に意識している様子であった。家庭科でも栄養教諭の授業後、箸のマナーについて再度取り上げたところ、箸の持ち上げ方、持ち方、置き方を再確認し、今後は意識して生活したいという感想を持っていた。また、給食委員会では、生徒が主体となって魚の食べ方DVDを流したり、校内放送で呼びかけたりした。

その他に、栄養教諭と連携して、各学年の発達段階に応じた栄養指導を行った。また、調理実習や継続して行っている月1食事作りは、食に関心を持つきっかけとなった。給食感謝集会では、調理員さんや地場産食材提供者への感謝の気持ちを表すことができた。

☆研究の成果と課題

活動後の感想等から、食に関する生徒達の意識は高まったことが分かる。今後もあらゆる方向からアプローチし、食に関心を持ち、正しい箸の使い方ができるよう、栄養教諭等と連携して取り組んでいきたい。

